

監修委員 井上靖 石森延男 更科源藏

編集委員 加藤多一 木原直彦 西田良子 和田義雄

第七卷

北海道児童文学全集



北海道児童文学全集

第七卷

立風書房



北海道児童文学全集 第7巻

21cm



昭和五十八年十二月一日初版第一刷発行

著者代表―後藤竜二

発行者―下野博

発行所―株式会社立風書房 東京都品川区東五反田三―六―一八

電話東京四四七―一一九一 振替東京五―七四四九三

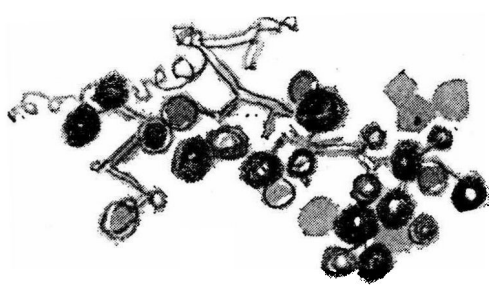
本文―信毎書籍印刷株式会社

製本所―株式会社難波製本

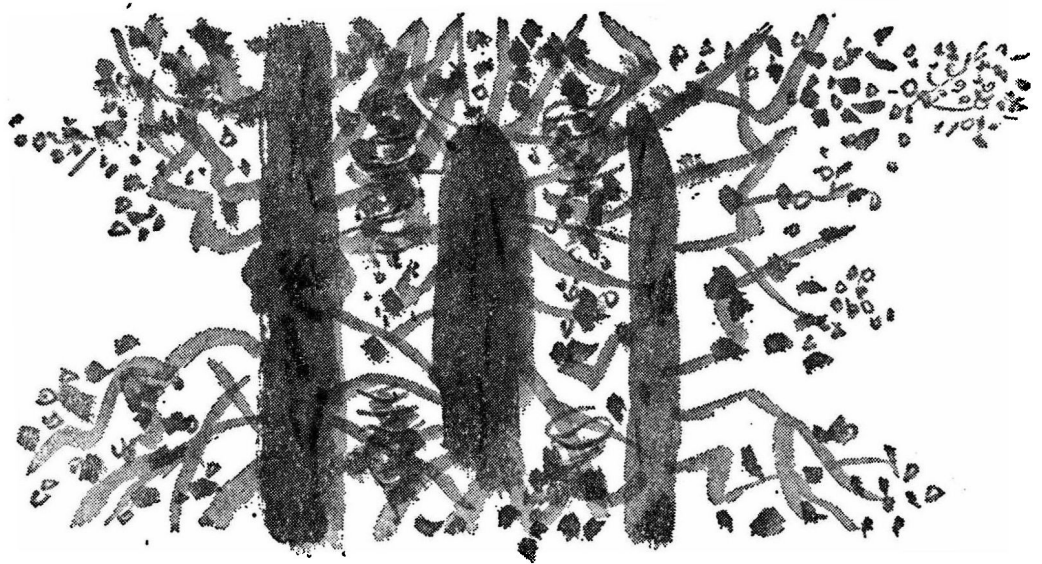
表紙・箱・絵印刷―株式会社廣濟堂

定価一八〇〇円

8393―50177―8909



北海道児童文学全集
第七卷 目次





天使^{てんし}で大地^{だいち}はいっぱいだ

コロポックルの橋^{はし}

解説

後藤^{ごとう}
竜二^{りゅうじ}
3

森^{もり}
一步^{いっぽ}
151

前川^{まえがわ}
康男^{やすお}
323





Wm. Steadman

てんし
天使で
だいち
大地は
いっ
ぱい
だ

ごとうりゆうじ
後藤竜二

第1章 だいしやう だろんこの中から

さえない始業式 しやうぎしき

ついてないんだ。ぼくら六年三組の担任 たんにん はキリコになっちまったのさ。みんなが前からしんばいしてたんだ。なんだかそうなるような気がしてね。だけどほんとになっちまったんだ。

ところで、こんなにぼくが大きなことか、六年生にもなったのに、女の先生に習 な わなけりゃなんないからなのさ。しかもキリコはしんまいのほやほやときてるんだ。

それが、どれだけいやなことかは、ぼくら六年生でなきゃわかんないかもしれないけど、とにかくそれはいいやなことなんだ。

でも、しょうがないからキリコのことを書いておくよね。キリコはあだ名だけど本名なんだ。「木山霧子 きやまぎりこ」っていうのさ。先生にこんな名まえがついてるなんてどう考えてもおかしいと思うんだな。だけど、あだ名としてはいいいせんいつてるだろ。「キリコ」ってぼくらはよぶのさ。そうさ、ぼくらは、デブだとかサルだとかイモム

シなんて、ぐれつなあだ名はだれにだってつけないのさ。ほんとだぜ。こんど五組の担任になった片山先生は「ミグ」ってあだ名だけど、あれなんかも苦労したんだ。ミグもキリコも、ぼくらに感謝してほしいというもんさ。あ、わき道にそれちゃったね。どうもぼくは、すぐおしゃべりをしちまうんだ。――キリコは先生一年生。二十四さい。独身。東京の音楽大学を卒業したんだそうだ。音楽の大学なんて、毎日毎日なにをやってたんだろうね。バイオリンがとってもうまいらしいよ。こんなこと、てんでぼくには興味ないんだけど、ロクがキリコの尾行までして調べたものだから、いちおう書いておくよね。

でもロクったら、すこしテレビの見すぎだと思うんだ。テレビの探偵にすっかりいかれちゃって、大きくなったら探偵になるんだなんていいだすしまつなんだからさ。「びこう」ってことは口にしたときなんか、てんで目をきらきらさせちゃってね。しあわせなやつさ。でも、もちろんぼくらはロクがすきなのにかわりはない、いやつだってことは知ってる。だけど、ちょっと子どもっぽいと思うんだ。

めんどうくさいから、もうキリコの話はやめにするよ。どうせ、いまにいやというほど、キリコがしゃばってくるんだろうからね。

わかってほしいのはね、「おわかくて、おきれいで、モダンな」なんて、おかあさまがたや女の子たちがいつてる先生に、これから一年間も習わなければならぬ、ぼくらの絶望的な気持ちなんだ。わかってもらえるかなあ。（わかってもらえなくなっちゃってかまわないけどさ。）

キリコがあらわれた

始業式がおわって、ぼくらは新しい教室であばれていた。春休みがおわって、ひさしぶりにみんなとあえたう

れしさもあったし、低能^{ていのう}の上級生^{じょうきゅうせい}がいなくなっちゃって、ぼくらが最上級生^{さいじょうきゅうせい}になったんだという解放感^{かほうかん}もあったけど、とにかくさ、新学年^{しんがくねん}でののは、いつでもいいものなんだ。

五年、六年と、組みかえはないから、クラスのやつらはみんな知ってるものばかりなんだ。

ぼくは、ジックとろうかでレスリングをやってたけど、バンド通しを三つももぎとられちゃったし、あきてもきたので階段^{かいだん}とびをやることにした。

六年三組——ぼくらの新しい教室は、いちばん北側^{きたがわ}の二階^{かい}にあったから、階段^{かいだん}にはすぐだし、おまけに職員室^{しやくいんしつ}にはいちばん遠いときてるから、階段^{かいだん}とびには最高^{さいこう}だったんだ。

階段^{かいだん}は、二階^{かい}からおどり場まで十五段^{だん}、おどり場から下までは十九段^{だん}ある。ぼくらは、十五段^{だん}のほうを使うことにした。先生たちに見つかっても、すぐ教室ににげこめるからだ。

ぼくとジックとロクのほかに四、五人が、まず八段^{だん}めからはじめた。そこから、おどり場まで、いっきにとびおるんだ。九段^{だん}、十段^{だん}、十一段^{だん}と、その数をふやしていくうちに、だんだん人数はへっていく。十三段^{だん}めに挑戦^{せん}しようとするときには、ぼくとジックとロクの三人しか残^{のこ}っていないかった。みんな二階^{かい}の手すりやかべにもたれて、ぼくら三人を見つめてるだけだ。ゆか板^{いた}にすわりこんで、

「いたい、いたい。」

と、うめいてるのは、九段^{だん}めをとんだとき、足首^{あしぐし}をねんざしちまったやつ。しりのあたりをおさえてしゃがみこんでるのは、十一段^{だん}めるとき、とびそこなって、いちばん下の段^{だん}に尾^びてい骨^{こつ}をしたたかうちつけたやつだ。いくじなしめ！

ぼくら三人は、十三段^{だん}めにならんで立って、おどり場を見おろした。

「よし、いくぞ！」

と、ジックがいった。なんでも思いきって、まずいちばんさきにやるのがジックなんだ。だからぼくは、ときどきジックがえらいなあと思うんだ。

みんながジックを見つめた。かたの力をぬいて、ジックは両足に反動をつけ、もういちど、おどり場をにらみつけると、とんだ――。ジックの大きなからだは空中にふわりとういて、ういたと思ったら、おどり場のゆか板がはげしい音をたてた。

ぼくらは、思わず声をあげていた。着地がすこしずつだったから、ちょっとばかり足首をいためたようだけど、おどり場に立ったジックは、とくいげにみんなを見あげてわらってみせた。ジックの顔は上気して赤かった。みんなが拍手して口ぶえをふいた。

「やったな。」

と、ぼくはいった。十三段といえ、ぼくらのなかでは最高記録だったんだ。

「こい、サブ！」

下からジックは、ぼくをよんだ。みんながぼくを見つめる。じつをいうと、ぼくは自信がなかったのさ。だどここのさい、とばなきやなんないんだ。そうさ、けがをしたってだ。クラスのこしぬけたちにわられるのなんて、思っただけでもしやくにさわる。

「いくぞ！」

ぼくは、両手をきつくにぎりしめてさげんだ。全身がすっかりきんちようしちまつてる。これじゃあとべっこない、とじぶんでわかった。足のほねをおるかもしれない――そう考えるともうだめだ。

「いくぞ！」

と、ぼくはもういちどいった。やけっぱちになってとほうとした。もう、どうにでもなるがいい！

「キリコだ！」

見はりをしてたやつが声をひそめてさげんだのは、そのときだ。

にげるのは、ぼくらの特技だ。みんな教室にとびこんで消えた。ロクなんかもっともはやい。だけどどうしたことか、ぼくはそこにつつ立ったままだった。下にいたジックがかけあがってきて、

「すまん。」

と、早口にいった。べつにジックを待ってたわけでもなかったんだけど、ともかくいっしょになって、教室にとびこもうとした。と——、

「待ちなさい！」

キリコが、ぼくのセーターのえり首をつかまえて立っていた。

おおいにぼくらはふんがいます

「わたしは木山霧子です。」

キリコは、ぼくとジックの前に胸をはって立ち、ぼくらを見おろしていた。茶色のとっくりのセーターに、黒いビロードの上着を着ていた。ぼくとジックは、なにもいわずにつつ立った。ほんとはさ、いえなかったんだな、いまいいけど。てんで、あつとうされちゃったんだ。ちくしょうめ！

「わたしは木山霧子。あなたがたの担任。」

ぼけなすのように、ぼかんとしているぼくらのまぬけづらにむかって、キリコはちょっとわらってみせた。クラスをやつらがくすくすわらいながら、のびあがるようにしてぼくとジックとキリコを見物している。

「ぼくは森谷三郎です。」

一歩さがって、ぼくは両足をそろえた。ついでに、

「こいつは——。」

と、ジックを紹介しようとしたら、ジックは、ぼくをおしのけて一歩前にでると、

「畠山実です。」

キリコは、ぼくらを見おろして、だまってうんうんと目でうなずいていた。

「ぼくらは、『ジック』とよびます。」

ぼくが説明すると、ジックは、ぼくのわきばらをつついてちよつとにらんだ。

「ふたりとも、ボスね。」

と、キリコがいった。ぼくらはようやくわれにかえって、おたがいに顔を見あわせた。するとなぜだか、きゅうにふたりともまっかになっちゃった。ぼくらは、すぐに視線をそらしてうつむいちゃった。

「ふふふ。」

と、キリコがわらった。

（こんちくしょう！）

と、ぼくは思った。ジックの心はもちろんわからないけど、やっぱりそう思ったにちがいない。いまにほえづらかくなよ、とぼくらは考えたんだ。

「よろしく。さ、教室にはいりなさい。」

キリコは、ぼくらの背をおした。席についたら、ジックが小さく、

「ちえっ！」

といった。ぼくはすっかりよろこんだ。やっぱりジックも、同じことを考えてたんだ。ぼくは、ジックにやつとわらいかけた。もちろんジックもにやりとわらった。同盟条約ができたのさ。

教壇に立ったキリコは、男のようにせきばらいをした。それからきゆうに、

「起立！」

と、号令をかけた。ぼくらは、そんなのはじめてだったし、まさかキリコが、そんなこというとは思ってもいなかった。おまけにキリコの号令があんまりいたについてたから、思わずぼくらは立ちあがってしまった。条件反射ってやつだよ。

みんなが立ちあがったところで、キリコはおもむろに礼をした。ぼくらもあわててそれにしたがった。すると、頭もあげきらないうちに、

「着席！」

ときた。

(むむむ、どうしてくれよう！)

まったく、これじゃあ、ちょっとばかりのしかえしでは、まだまだだいたいぶ借りになりそうだ。

ぼくは、しんまいのキリコを、どんなふうにしてとっちめようかと、つくえにひじについて考えはじめた。しんまいの女の先生なんかになめられてたまるもんか！

かくてぼくらは戦闘開始

「サブちゃん！」

と、キリコの声でした。ぼくのまわりで、クラスのやつらがげたげたわらった。

「サブです！」

ぼくはおこった顔でいった。サブちゃんなんて、まったくちゃんちゃらおかしいってもんだ。そんなの、幼稚園か一年ぼうずにつけるものなのさ。ぼくは六年生なんだぞ。

「あなたの番です。」

顔をあげたら、キリコがぼくを見つめてわらってた。みんなが順番に自己紹介をやってたんだ。

ぼくは、キリコをやっつける方法をあれこれ考えて、じぶんの番になったのもうっかりわすれちゃってたのさ。ひとつのことに熱中すると、ぼくはほかのことをわすれちゃうんだ。そういえば、さっきジックがぼくのわきばらをつついてたっけ。

「うるさいな。」

なんて、ぼくはじぶんでも気づかずにいったんだろな。

「わかってます。」

と、ぼくはおもむろに立ちあがった。

「森谷三郎です。サブとみんながいます。だからサブです。おさないときから頭がよく、やがて天才になるだろうとみんながいつてましたけど、このあいだイヌにはえられてから、どうもぐあいが悪くなりました。そのせいか、いまだではあまり勉強がすぎであります。それでも学校へきてるのは、頭のかっぱなジックや、おっちょこちょいのロクと友だちだからです。」

わらい声があがって、拍手があつた。キリコも歯を見せてわらってた。ぼくは着席した。

「おうちは、農家^{のうか}なのね。」

キリコは、教卓^{きょうたく}の上のえんま帳^{ちやう}を見ながらいった。

「はい。」

と、ぼくはこたえた。

「おうちでは、いま、どんなことをしてるのかしら。」

「ビニールハウスをたてて、熱線^{ねっせん}を入れた温床^{おんしょう}でレタスや、ナスや、メロンや、トマトなんかの苗^{なえ}を育ててます。」

「まあ。」

と、キリコはぼくの顔をじろじろながめた。あんまり長いあいだ見ているから、ぼくはてれくさくなって、ジックにいたずらをしかけた。

「あなたもずいぶんおてつだいするのね。」

「あんまりしません。」

「けんそんななくてもいいわ。」

「けんそんなんで、へんなものしません。」

「そんなたぐさんのこと、すらすらいえるほど、お仕事^{しごと}のこと知ってるなんて、やはりおうちでは、よほどおてつだいしてるのよ、えらいわ。」

ジックが、ぼくのわきばらをつついた。じぶんの家の仕事^{しごと}を知ってるのは、ぼくらのあいだじゃ、まるであたりまえのことなんだ。

「ああれえ。」

と、すっとんきような声をあげたのはロクのやつだ。クラスのみんなが、くすくすわらってうしろをふりむき、ぼくを見世物みせものみたいにながめやがる。ぼくは、もうすっかりまっかになっちまった。

(ちくしょうめ！ そのうちみてろ。)

と、ぼくはかたく心にちかった。

ああ休戦きゆうせん

いまぼくは、じぶんの低能ていのうをしみじみ悲かなしんでるんだ。ほんとうに。始業式しぎょうしきのその日から、ぼくらは、キリコ攻撃こうげきをはじめた。

まず最初は、ジェット機きの絵えさ。これをまんがのうまいロクが黒板こくばんいっぱいにかきつけて、ぼくやらジツクやら、五、六人が肉づけしたんだ。ひどくふとったジェット機きになった。

ぼくらは、すっかりまんぞくして、教壇きょうだんの上をはしゃぎまわった。ぼくはものすごく大きく、「グラマン」と書きそえた。こいつはみんなの氣にいった。そこでぼくらはいつそうわらいこらげた。グラマンで、グラマーなジェット機きのことさ。これぐらいのこと説明せつめいしなくなつてわかるだらうけどね。

ところがさ、まったくくさっちゃまう。

というのはね、女の子たちに総スキャンそうせんをくわされたのさ。もうれつにおこつて、教壇きょうだんの上のぼくら七、八人につめよってきたんだ。もちろんリーダーはミツコとデッコさ。

「まあ、ぶじよくだわ。」

「先生せんせいだけじゃなく、わたしたち女性じよせいにたいするぶじよくだわ。」

「ぐれつよ！」

「キリコ先生は、そんなおでぶちゃんのイメージなんか、これっばかしもないわよ。」

そして最後には、

「ほんとにセンスがないわね、あなたたち男の子ったら！」

ときた。ちえつ、センスがないのはミツコやデッコのことをいうんだ。ぎゃあぎゃあ、ぎゃあぎゃあ、まったくうるさいったらありやしない。

ロクもジツクもお手あげだ。どうしたものかと、ぼくをちらちらうかがってる。なんでも責任は、ぼくにきちやうんだからな。でもぼくは、低能ていのろうの女の子なんかと口げんかをするほどおめでたくはないんだ。

「かってにしやがれ！」

おきまりのすてぜりふを残のこして、教壇きょうだんをおりようとしたら、

「そのまま、そのまま。」

キリコがすました笑顔えがほで、教室にはいつてきた。

「先生、サブちゃんたちが——。」

でしゃばりデッコが、あまつたれちゃって、キリコのそばにすりよった。

ぼくは、女の子をにらみつけるようなぐれつなまねは、しないことにしてるんだけど、このときばかりは、しょうじきいって、デッコのウマのしっぽみたいな髪かみの毛を、いやというほどひきずりまわしてやりたかった。

ところがさ、キリコは、デッコの声なんかでできこえないような顔をして、つくづく黒板くろばんのグラマンを見つめてるんだな。

こいつにや、ぼくらも、ミツコやデッコたちも、すっかりまいっちまった。